

はじめに

私は1954年生まれ、和歌山県に住んでいます。今なお、看護師と助産師の仕事をしています。

『日いつる国の僕たち』は10代の若者たちのひと夏の物語です。ある若者は突然、自分の中に舞い降りた、棘のように小さいけれど無視できない疑問に向き合います。経験も知識も未熟ですが、そのまっすぐな視線と真摯な情熱が彼を動かしていきます。やがてそれは、周りの人々をも巻き込み、さらなる謎へと、それぞれの若者が向かっていきます。若者たちはこの夏の日々を通して、自分たちのルーツや、体の中に眠る気質について考えさせられていくのです。

さらに、周りの大人に助けられ、絡み合った謎が、遠くアジアの西の端から始まっている

ことに目を向けます。気の遠くなるような長い流浪と困難を極めた旅路を強いられた人々に思いをはせ、生きていくための過酷な環境の中で育まれた知恵や技術のうえに、若者たちは今、生きていることを実感します。

この物語の根底に流れているのは「歴史と愛」です。人と人との愛の形はもちろん、自然に対する愛と感謝が、生きる根底になっています。

この物語を書こうと思ったきっかけが3つあります。

1つ目は、小学生の頃のことです。祖母が土間で椅子に腰かけ、ストーブで体を温めていました。私は少し離れたところに座り、なんとなく祖母を眺めていました。そのとき、突然、ささやくような声が聞こえてきたのです。「おばあさんは、どこから来たの？」当時、私の周りで、身長が170cm近くあるような大柄の女性は祖母だけでした。高い鷲鼻わしばなと切れ長の鋭く黒い瞳。その風貌は、私にとって印象的で、何かを思い出したかのように私に「違和感」を落としていきました。

2つ目は、私の生まれた国の人々の「気質」です。若い頃は、海外にもよく行き、さまざまな人と接する機会がありました。そこで感じたのは、自分の考えや好みを押し通す、つまり、自己主張より少し強いような気質を持った人が多いということです。もちろん個人差はあります。若い頃は、自分の意見をはっきり言える気質がうらやましく、自分もそうありたいと願ったこともあります。けれど、最近思うのです。私の国の人々の「気質」は、特有のものであり、もしかしたら「平和」という宝石を抱いて生まれてきた人々なのかもしれない。なぜ特有なのか。

その答えを知りたいと思いました。

3つ目は、自分が思うことや感じることを素直に話せる友人の存在です。彼女は子供たちに絵を教えている先生で、美術品の中に込められた文字にならない思いを言葉で教えてくれます。

私が小学生の頃に見た祖母の話をしたとき、彼女はしばらく考えてから、「淡路島にユダヤ人がいたという説がある」と話ははじめました。私は、話がとんでもない方向に進んでいる

ことに驚き、思わず笑ってしまいましたが、彼女は真剣でした。その後、彼女に勧められた本を何度も読むうちに、私の中にあつた「違和感」と「知りたいこと」が線につながりはじめたのです。

自分の中にある「違和感」や「囁き」^{ささやき}、目の奥に浮かぶ映像を文字にしたいと思つたのは65歳を過ぎた頃です。文章を書くことが得意なわけではありません。けれども、私の中にあるたくさんのメッセージのうちの1つを、助けを借りながら、今回書いてみようと思います。そして書くことで、ひとつひとつを手放していきたいと思つています。

応援おねがいします。